
晴明の孫

和 四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴明の孫

【Nコード】

N9536H

【作者名】

和 四季

【あらすじ】

嬰兒が生まれ三年幼子が着袴を済ませる前に、見鬼の才を封じられた。見せもんじゃねえぞ初対面の再会を心に宿して。彼は少年に寄り添い守る。光を。希望を。温もりを。

新緑の風に抱かれる（前書き）

少年陰陽師のファンフィクション。SSの集まりとなります。まとめるために連載となっておりますが、読み応えはありますので、留意いただければ幸いです。

新緑の風に抱かれる

「待て、清明っ……清明！」

春の陽射しが眩しく、安倍邸の庭も緑が美しくなってきた頃。

簀子に出て新緑の風を感じながら、清明は日光浴をしていた。

先程まで清明が抱いていた末孫を——紅蓮に押し付けて。

「良い天気だのう。昌浩もよく寝ておる」

「せ、清明、俺では駄目だ、清明っ」

困り果て、情けない声を出したのは十二神将がひとり騰蛇。

美しい顔立ちに、濃色の髪、耳はやや尖んがった形で、逞しい体軀に纏うのは、神仏のそれに近い。

紅蓮は無表情な事が多いが、今は、相当焦っている様子が金色の瞳からよく読み取れた。

清明の末孫、昌浩が生まれてから一月ばかり経った頃。

毎日、もしくは一日置きに遠くから昌浩を見たり、隠形し神氣を出さぬようにしながら昌浩を見たり。

という紅蓮に痺れを切らした清明が、昌浩を連れて自室に戻ったのだ。

ちょうど、昌浩の母である露樹^{つゆき}が産後の療養も終わり、家の事をしていたので昌浩の面倒を買って出た清明は、そのまま紅蓮に昌浩を押し付けた。

「子供は寝ると重くなるからな、わたしにはちとキツイ」

「だからって、何故俺が……天一なり六合なり白虎なりいるだろう！」

安倍家では、神将が子供の世話をする事が多い。

昌浩の兄達も、神将に世話をされ弓や剣の使い方まで仕込まれている。

「そう大きい声を出すでないよ、紅蓮。昌浩が起きてしまうだろう」

「む……」

押し黙った紅蓮を見て、清明は目を細める。

紅蓮に、昌浩の世話をしろと言ったらコレだ。

清明の息子であり、昌浩の父、吉昌も他の神将では駄目なのかと問ってきた。

それでも、紅蓮を呼び出したのは、紅蓮の表情の変化が見たかつ

た。それだけだ。

吉昌も小さい頃はやはり泣いた。今では普通に接しようと努めるが、それでも根本的な所は変わらない。

決して危険というわけではないが、自分が本能で怖いと感じてしまう騰蛇に可愛い末の子を預けるのは気が引けるのだ。

慌てふためく紅蓮が見たい。と言う清明に軽く溜息をつき、昌浩が泣いたら止めてください、と釘を指すが、清明は愉快そうに笑っただけだった。

「ほれ、もっと腕にしっかり抱いてやらんか。寝づらいじゃろっ?」

「俺は赤子を抱くのは初めてなんだぞ……こ、こうか? 難しいな」

二の腕に頭を置いて抱き抱え直そうとした時に、昌浩が身じろぎし眠そうに眼を開けた。

「ま、昌浩、起きたのか」

どうしていいか分からない紅蓮は、助けを求めるように清明に視線を向けた。

この状態でもしも泣かれたら、立ち直れない。

「起きたか、どれ昌浩……?」

「清明、早く昌浩を」

清明に昌浩を返そうとした紅蓮の腕の中を見て、清明は嬉しそうに笑った。

「清明？」

「紅蓮は、昌浩に気に入られようじやのう」

ふと、視線を清明から戻せば、紅蓮に抱かれたままの昌浩が、一生懸命小さな手を伸ばしていた。

「なんだ……？」

「紅蓮の金冠が気になるようじやの」

扇で緩んだ口元を隠しながらも、ニヤニヤと笑みを浮かべながら紅蓮を見やる清明。

「これか、昌浩」

「あー……う！」

額に光る金冠に触れる辺りまで、位置を変えてやると、嬉しそうに昌浩は金冠を掴む。

「ちょ、昌浩、待て待て！」

紅蓮は赤子の力が意外に強い事を知らず、慌てて昌浩の手を外して息を吐いた。

「赤子の力は強いじゃろう？」

「ああ、驚いた」

昌浩の小さな手は、今は紅蓮の指を掴んでいた。何が嬉しいのか、笑いながら手を上下に振っている。

「変な奴だな、昌浩は」

「可愛いと素直に言わんか」

「それは、ただのじじばかりだろ」

清明に軽く返事をしながら、紅蓮は昌浩から目を離さない。

「未恐ろしい孫だよ、お前は」

「あー」

「素直じゃないのう、紅蓮は」

「うー」

決して指を離さずに、言われた言葉に目を瞬きながら、次の瞬間には眩しい笑顔を紅蓮に向ける昌浩。

「明日もまた、晴れそうじゃのう」

清明が庭に目を向けると、サワリと優しい風が吹き抜け、緑の匂いと暖かい日差しが、3人を包んだ。

「ああ、そうだな」

明日もまた、ここで。

玉露に濡れて

鬱々とした梅雨の雨が上がり、少しばかり夏の匂いが香る頃。

「子供の成長とは早いものじゃのう」

安部家の末孫は、生まれてから五ヶ月を過ぎようとしていた。

あれから、こうやって何日かに一度、晴明の部屋に昌浩を連れては紅蓮が遊び相手をしていた。

「本当に、成長とは早いもんだな。昨日までは腕に抱かれるしかなかったように思える」

紅蓮は、晴明の向かいに腰を降ろし、ちょうど二人の間に座る昌浩の背中を支えていた。

首もすわり、ごろごろと寝返りをうち、座ろうと試みてはそのまま後ろに転げる日々。

喜んで転がっているのはいいが、簀子でそれをされては見守っている方が肝を冷やしてしまう。

「あーっ、うー」

「楽しそうじゃのう」

「今体を支えているのは俺だからな、楽に遊べるだろうさ」

あまりにも景気よく転がる昌浩に、紅蓮は昌浩を座らせ手を添えた。

昌浩は昌浩で、安心しきって体を紅蓮の手に預け、自分は晴明のくれた符で遊んでいる。

せがまれて与えた一枚は、渡した次の瞬間に二枚に裂けた。

「もう符に興味があるとは、将来が楽しみでならんのか」

乾かし終えた真新しい符だったというのに、昌浩を見る晴明の視線は、どこまでも優しい。

「ただ目の前にあっただけだろう。じじばかめ」

「何を言うか。目の前には他にも色々あったぞ、その中で符を手にとったんじゃないぞ？ 将来有望じゃろう？」

可愛がり方が度を過ぎてるのは、やはり歳を重ねてからの小さい孫だからか。

だが、まだ一歳の子供の将来を語るのは、早過ぎるだろう。と言ってみるも、効果はなかった。

「わかったわかった。確かに、楽しみではあるな」

特に神気を抑えているわけではない紅蓮が側にいて、楽しそうに遊んでいるのだから。

「そうじゃ、昌浩や、お腹が空いてはおらんかの？」

晴明が取り出したのは、器に入った粥だった。

「晴明……それは、まだ早いんじゃないか？」

普段、晴明や他の者が口にする粥よりも、かなり緩くしたもの。

「大丈夫じゃよ。これは五分粥じゃし、今日は重湯を含ませるだけだからのう」

「そういう、ものか……」

紅蓮は、他の神将達と違って、赤子の世話などしたことがない。

どのくらい成長をしたら、座り、寝返りをうち、這うように進むのか、母の乳からどうやって他の食べ物を食べさせるのか、そういった事は詳しく分からなかった。

「そういうものじゃ、ほれ、昌浩」

匙で粥の上澄みを掬いあげ、昌浩の口元へと運んでみれば、パクツと口に含んで匙ごとくもぐもぐしている。

「ほほっ、大丈夫そうだの。紅蓮もしてみるか？」

器を紅蓮に、昌浩の背を代わりに支えて、紅蓮の方を向かせる。

紅蓮は、晴明から渡された器の粥を見つめ、ひとつ息を吐くと、

注意深く上澄みだけ掬い上げ——ようとした。

「そんなに綺麗に取ろうと思わんでも、粥はすり潰してあるから平気じゃよ」

「そ、そうか」

五回失敗を繰り返した所で、見兼ねた清明が苦笑しながら言う。

「昌浩が待つておるぞ、紅蓮や」

「あ、ああ……」

闘将とは思えないぐらいの繊細な動きに、清明は笑いそうになるのを堪えていたが、向かい側にいる紅蓮には肩が震えているのが見えていた。

「清明。笑いたいなら笑え」

「す、すまんすまん、紅蓮が粥を運ぶのに、よもや手を震わせるとは思わなんだろう」

「うー！」

くすくすと笑う清明に懨然としつつ、紅蓮は昌浩に近づく。

昌浩は、いつまでたっても口元にやってこない匙に、痺れを切らせていた。

零さないように、と、器と一緒に昌浩に近づいた紅蓮に、昌浩が

早く早く、と手をのばす。

「こ、こらっ、昌浩！」

紅蓮が慌てて身を引くも、匙に向かつて伸ばされた手は器へと届いており、紅蓮の大きな声にびっくりした昌浩が手を払えば、勢いよく器が空を舞う。

ゴツという音に続いて、コトンと器が床に転がった。

「うーあー！」

びっくりしたのが面白かったのか何なのか、昌浩はキャツキャと手を叩いた。

その周りは、しばし空気が止まっていたが、少しばかりした後、ようやく晴明が口を開いた。

「紅蓮や」

「なんだ……晴明」

「今のは、ほれ、防ぎ用のない事故じゃ」

「……そう、だな」

「うむ。顔、洗ってこい」

「ああ……そうする」

払われた器は、綺麗に空を舞った後、そのまま紅蓮の額にあたり、下に落ちた。

「全く……お前というやつは」

緩い粥の滴る顔を、軽く手で拭って紅蓮は苦笑しながら消えた。

「全くじゃのう」

笑っていた昌浩は、目の前から消えた紅蓮を探すように顔を巡らせ、晴明を仰ぎ見る。

「顔を洗ったら、すぐ来るよ、粥も片付けねばなんしの」

「うーえ！」

言葉が通じるわけではないが、昌浩はにぱつと笑ってまた手を叩いた。

まるで、紅蓮に早く戻ってこいと、急かすように。

「本当に、将来が楽しみじやの」

その様子に、晴明はただ笑みを浮かべるばかりだ。

孤独の闇に捕われた彼を、心から信頼し求めるこの子に。

閑話 ふたりもののけ

「もっくん。ねえ、もっくん、もーっくん？」

秋も深まり、朝はこれでもかというように冷え始めた最近の事。

本日の昌浩は物忌みなので出仕はせず、自室で黙って本を読んでいた。

隣が静かになったので、名前を呼んでみた昌浩だったが、いつのまにか隣にいた物の怪は寝てしまったようだ。

やはり、寒いのだろうか。丸くなつてくうくう寝ている。

白い猫とも犬ともいえない、この物の怪。

本性はこれと似つかない長身の男性なのだが、あれが丸まって寝ていると思うとなんとも言えない気分になる。

もっくんの時の紅蓮と、紅蓮の時の紅蓮、何か切替があるのか。

……いや、紅蓮の時の紅蓮でなんだ。

「昌浩？」

ふと、かけられた声に振り向くと、そこには彰子が佇んでいた。

「彰子、どうした？」

「うん、これ一緒にどうかと思って」

盆の上に乗せられた、お茶と少しばかりのお茶受け。

それを二人の間に置いて、一息つく。

藤原の一の姫にこんなことをさせているのはどうかと思うのだが、彼女がいいというのでそのままにしている。

どうかとは、今も思っていたりするのだけど。

「もっくん、寝てるの?」

「そうみたい、物の怪なのにねえ」

「物の怪は寝ないの?」

「え? あ、いや、そういうわけでは、ないけど」

他愛もない話をしながら、昌浩は干し桃を一口口に含む。

甘酸っぱい香りが口の中一杯に広がり、頬が緩んだ。

「ねえ、天一から聞いたのだけど、安倍の家では子供のお世話を神将がしたりするのでしょうか?」

「あーうん、そうみたい」

「昌浩もそうなの?」

「あんまり覚えてないんだよね、俺は見鬼の才を封じられていたし」

「もっくんが一緒にいたわけではないの？」

首を傾げ、さも当たり前のように聞いてくる彰子。

だが、言われてみれば、確かに。

自分が小さい頃は、この物の怪は何をしていたのだろうか。

いやでも、勾陣の話によると、自分が生まれた時には会っているようなのだが。

ならば、初めて会ったのは、あの見世物じゃねえと悪態をついた時ではないのか。

だからといって、自分がこの物の怪に育てられたとは考えにくいのだが。

そんなことないのかな。俺が風邪を引いた時の看病は、結構慣れていたし。

いや、でも、それなら兄様達のことを見ていたのかもしれないし。

俺全然覚えてないし。

「昌浩？」

「え、あつ、何？」

自分の世界に入って考え事をしていた昌浩は、彰子の声に呼び戻される。

「ずっと、黙ってるから」

「いや、俺の小さい時って誰が面倒見てたんだろうなーって思ってた」

「もっくんじゃないの？」

「でも、この白い物の怪に育てられたとは思えないんだけど」

本性の方ならば考えられるのだが、彰子は紅蓮を知らないから言わないでおく。

二人で首を傾げ、目の前で丸くなって寝ている物の怪を見つめる。

「もっくんが起きたら聞いてみようか」

「そうね、聞いてみたいわ、昌浩の小さい頃の話」

「え？そ、そう？」

「うん」

二人でいる時くらい、俺の話じゃないことでも話せばいいのに、この孫は。

なんて思った物の怪だったが、いざ昌浩の小さい頃の話がどうのだから、それなら彰子の小さい頃がどうのとか。

自分のいない所でして欲しい。いやここは昌浩の部屋なのだから問題はないのだが、心底まどろみから起きるんじゃないかなかったと思う物の怪だ。

ピクピクと動く耳と尻尾が、バレないことをとりあえず願っておう。もう少しだけ二人で話していればいいさ。

落ちる花びらが水面に咲くのは

夏の陽射しが蔭りはじめた季節は、暖かい気温が次第に下がり、部屋には火鉢が用意され、小さな火が燈される。

そんな中でも子供は元気に動き回り、明るく笑いかける。

「何が面白いんだか……」

壁に背を預け、片膝を立て楽に座る青年が一人。

髪は濃色、ざんばらで整ってはおらず、そこには金色に輝く金冠がはめられていた。

前を見つめる瞳は、どこまでも優しく温かさを秘めながら細められている。

青年は、あの安倍晴明に仕える十二神将が一人、神力は十二人いる中で最強かつ苛烈で、人から畏怖され怯えられ、神将からは忌み嫌われる存在、火将騰蛇。

晴明より与えられた二つ名は、紅蓮。

騰蛇の扱う炎が、まるで水面に浮かぶ紅の蓮のよう、そう笑っていった彼の声は今でも耳に残っている。

紅蓮の見つめる先にいるのは、晴明ではなく、その孫にあたる安

倍昌浩。

生まれおちた日から、半年を過ぎたほどになるか。一人では動けもしなかった体を這うように動かしたかと思えば、紅蓮の腕を伝って立ちあがり、それを過ぎれば一人で歩き始めた。

「人間とは、すごいな」

人の成長には目を見張る。自身が生まれ落ちた瞬間などとうに忘れたが、神将とは人の心から生まれるものであり、その存在が許された時には、すでに自分が何者かを理解し、すでに仲間とは一線を引き接し、すでに恐怖と畏怖が混じり合い、忌まわしい存在を受け入れていた。

それが当たり前だと。

「れえ…、ん！」

同じ神将でさえ、用が無ければ話しかけることもしないというのに、目の前にいる、この人の子は笑うのだ。

笑顔を向けられ、信頼を示すように、腕の中に入り込んで、温もりを確かめながら眠りにつく幼い子。

「本当に、何がしたいんだか……」

呆れているはずの声には似合わず、くすりと笑うその表情は紅蓮がこの昌浩にしか見せないものだ。

他の神将も、その当人も気付いてはいない変化は、水面に落ちる花びらが起こす波紋のように広がり始める。

落ちた花びらは沈み、広がる波紋はどこまでも続き、鼓動を奏でるように紅蓮の中に響く。

積もる花びらが、一対、また一対と重なり、大輪の花となるまで、まだ、まだ、もう少し。

紅く燦るその中に

暦の上では未だに夏。青々とした木々が風にそよぎ、葉がなびく。気持ちのいい風と感じるのは、陽射しが高いほんの一時で、この季節は秋へと移り変わろうとしていた。

「れえーん！ツ……ぶきゅ！！」

「昌浩、何回転べば気が済むんだお前は」

安倍昌浩の面倒は、いつしか紅蓮が見ることとなっていた。主である晴明より下された命であれば、否と答えることも、しようと思ふこともない。

言っても無駄だから、と学習した類のものであることは否めないのだが。

「大丈夫か、昌浩」

歩き回っている昌浩は、生後半年とふた月を過ぎたころ。

自分の足で歩くのが楽しくて仕方ない様子で、歩いては転び歩いては転び、歩き回っては盛大に転ぶ。

その度にかげより、抱き起こすが、当の本人は痛さよりも楽しさが上回っているらしく、紅蓮の腕からするりと抜け出し笑いながらまた転ぶ。

「何がしたいんだ、お前は」

キャツキヤと弾む声は、転ぶことを前提にして発しているらしい。そして、転んだあとは紅蓮が抱き起こすまで立ち上がらずに待っている。

「そろそろ体が冷えただろう、大人しくしている」

「あーあつ。やあ、れーん」

抱き起こせと視線で訴えていた昌浩を抱き上げ、火鉢の傍に座り、小さな体を膝に乗せる。

「体が冷えている、寒いと風邪を引くだろう」

「うーうー、う?」

嫌だと体を捻る昌浩を抱え直し、頭を撫でてやれば諦めたのか大人しく膝に収まったが、今度は火鉢の中の赤く灯る炭に気になるらしい。

「それは熱いから、触るなよ」

「んーっん、れん、んーっん、れん」

火鉢の中を覗いては、紅蓮を見上げてにつこり笑い、また火鉢を覗く。飽きずに繰り返すその動作に思わず笑みが零れた。

「なんだ、昌浩」

真つすぐ向けられる視線は居心地が悪い、そう呟くと、それは初めての事に戸惑っているだけだと、清明に言われた。

「れーん、ん！」

手を伸ばしてくる子供に顔を近づければ、嬉しそうに笑う。向けられた視線に、笑顔に温もり。それはまるで光のようだといつも紅蓮は思う。

「んーっ」

「どうした？」

いきなり身を乗り出した昌浩に、紅蓮は怪訝そうに眉を潜める。

そんなことはかまいもせず、昌浩が楽しそうに手を伸ばしたのは、赤い火が灯る火鉢の中。

「まてまてまてまてっ！」

「なーうおーっ……んう！」

慌てて昌浩の手を止めた紅蓮に、腕の中からは小さな体全体を使つての抗議があがった。

「こら、暴れるな。これは熱い、火傷をする、痛いから触ってはいけない」

「やーっ、ううー」

昌浩はぶくつと頬を膨らませて、紅蓮に掴まれた腕を上下に振る。

「それは火がついてる、こっちならいいが……」

紅蓮が取り出し、昌浩に与えたのは、火のついていないただの黒い炭。

昌浩は、受け取った炭を手に持ち、勢いよく外に投げた。

小気味いい、ぽちゅん、という音が小さく響く。調度よく池に入ったらしい。

「……何がしたいのか、聞いてもいいか……」

「れーん！ れえ、あーあえ！」

もぞもぞと動きながら、必死に火鉢を指差し、紅蓮に期待を込めた表情を送る昌浩。

昌浩の子守をするようになってから、だいぶ意志の疎通ができるようになった紅蓮からは、呆れた声が出る。

「お前なあ……いくら俺が火将でもそれは酷いだろっ」

手づかみで火の灯る炭を取ってこいというのか。それは酷くないか晴明の孫よ。

祖父が祖父なら孫も孫で、危ないことをやろうとしたり、無茶なことを平気で言う。

だが…だが、それはちょっと酷くないか清明の孫よ。

「あれは熱いから駄目だと言っているだろう」

「んうーう！」

「こら、髪を引っ張るな、人の嫌がる事をしては駄目だ」

子供には繰り返して言うても、なかなか理解はしてもらえない。軽く頭を叩き、昌浩と目線を合わせるように抱き上げてゆっくり喋りかける。

「んーん……れえん」

悪い事したら、謝る。言葉の数がまだまだ少ない昌浩は、それを態度で表し、紅蓮の首に抱き着いてぐいぐいとおでこを押し付ける。

「わかったわかった、ごめんなさいだな」

そのまま背中をばんばん、と叩いていれば、いつのまにか寝息が聞こえてくるようになり、完全に寝てしまった昌浩を茵に寝かせ、桂をかけておく。

「なんでそんな顔ができるんだろうな、昌浩」

目の前にいる、安心しきった顔で寝る子供に問いをかけても返ってはいない。

小さな手が紅蓮の衣を放さずにいるなか、時間はゆるやかに流れていく。

「まったく……やはりお前は、清明の孫だよ」

苦笑いしながらつぶやく声音は、昌浩に向けられる視線と同じく優しいもので、外から入り込む風が同じように二人の髪を撫ぜる。

「寒い寒いッ」

バタバタと足早に自室に走り、暖かい火鉢の側に急ぐ昌浩。

「今日はそんなに冷えてないと思うがなあ」

「それはもつくんが毛皮着てるからだよ、いいよなあ、あつたかくて」

「もつくん言うな。それについてこないだまでは、暑苦しいから寄るなど言ってたのは誰だ」

「それはそれ、これはこれ」

両手を擦り合わせ、隣に座った白い物の怪には目もくれずに、火鉢を覗き込む昌浩が、ふいに物の怪に視線をむけた。

「なんだ、昌浩」

「うん」

聞いてない。

「んー……うん」

火鉢に視線を戻したかと思えば、また視線を向けてくる様は、昌浩が幼子だった頃を思い出す。

「それに触れたら火傷するぞ、清明の孫や」

「孫言うな！わかってるよ、そんなこと」

なぜ火鉢の中で燻る炎が気になるのか。火鉢の炭火を見ると、熱いと分かっていながら惹かれ触りたい衝動にかられる。

熱いからしないけど。

軽く考えてみたものの、理由は分からなかった。だが、また違うことを頭に思い浮かべ、昌浩はへら、と笑う。

「なんかさあ、もっくんの紅いのと同じだよね、あつたかいし」

「意味がわからんぞ」

「なんかほら、あつたかいじゃん。紅は優しい色だよね、夕焼けも、炭の火も、人に優しいんだよ」

何気ない昌浩の言葉は、いつでも優しさに溢れている。優しいのはお前だと、喉まででかかったのを止め、かわりに出て来た言葉は。

「なんでそんな顔ができるんだ、昌浩」

「それは一体どういう意味なんでしょうねえ、物の怪さん？」

あの頃返ってこなかった問いには、今は半目で問い返してくる幼い子。

くつくつと喉で笑いながら、白い体を丸めて眠りの体制をとると、隣からは寝るなと声がかかったが、気にせず尻尾を振って返事をした。

季節は秋に差し掛かる頃。あの頃と同じように、少し冷たい風が部屋に入り込んでいた。

昌浩は覚えてない。騰蛇も知らない。

寄るとあたたかく迎えてくれる人。

紅く灯る火は、その人の体温のようで、あたたかいその人と同じように、ぎゅっと抱きしめてみたかった。

いなくなってしまったあたたかいその人。

探しても探しても見つからない、危ないと分かっているながらも、
あの温もりを手に感じたくて、幼い子は火鉢の側でじっと見つめる。

紅く燦る火の灯を。

宵ゐ

宵ゐ

今夜の月は満月。

涼しい風が顔を撫でて部屋を心地よく冷やす。

「……う」

部屋の主である晴明は仕事の為不在だが、今ここには、孫の昌浩がちょこんと座っていた。

その隣には、頭痛でもするのか、頭を軽く抱えている青年がひとり。晴明に仕える十二神将、名を騰蛇。

隣に座る昌浩を見やり、ため息をひとつ。

「昌浩、晴明はまだ帰らない。お前は先に寝るんだ」

「やあもん」

「まーさーひーろ」

「やぁもんツ！じいま！」

「だから、晴明はまだ帰らんと言ってるだろう！」

「やぁもんツ！れんばか！」

「なっ……昌浩お」

おまえなあ……と、大きなため息と共に悲しみを抱えた紅蓮は、遠い夜空を見上げて、主を待つしかなさそうだと悟った。

「何をしているんだ、騰蛇よ」

「……勾か……昌浩が、晴明を待つと言ってこの有様だ」

見て分からないか。とでもいうように、不機嫌極まりない視線を目の前に現れた女性へと向ける紅蓮。

長身で整った顔立ち、黒曜の瞳にじわりと苦笑いを滲ませたのは、紅蓮と同じく、十二神将がひとり、勾陣こうちん。

その落ち着いた風貌からは、闘将であり、紅蓮に次いだ通力を持っているとは思えないだろう。

「そうか、そういえば今夜は晴明と一緒に星を見ると言っていたな」

「ああ、そしてどこぞの貴族が、妖と出くわしたから抜いっいでに占いを、だろう?」

「……あと1刻は戻らないだろうな」

紅蓮の膝に手を置き、それを枕にするように、頭を傾けた昌浩が目の前にいる。

紅蓮の側ですやすやと眠る姿にまだ慣れない勾陣は、二人の姿をじっと見つめた。

なぜ泣かないのか、なぜ怯えないのか、なぜ平気なのか。

おそらくは、紅蓮自身が己の中で昌浩に何度もしたであろう問いを、勾陣もあの幼い子にしてみたいくなる。

この子供の側にいるようになってから騰蛇は変わったと、不意にそんなことを思う。

今でも、太陰は怖がって寄らないし、他の神将にしても騰蛇にはあまり近づかない。

それは、騰蛇という神将の存在だけが原因ではなく、人にとってはまるで昔、神の眷属である自分達にとっては、瞬き程度の前の事柄が、決定打となったのだ。

それと思うと、他の神将の行動も仕方ないのかもしれないが、長く生きる分、傷は双方に深く刻まれ、消えずに長く引きずるしかない事に気付かぬはずもなく、やる瀬なさが心に浮かぶ。

勾陣はこの男が、忌み、嫌悪するような相手ではないと思っている。太陰のように騰蛇に対して、怖いなど思ったことが一度もないから、というだけではなく、騰蛇自身が、ただ不器用であるがゆえの誤解が数多く存在することも知っているからだ。

「そのままでは昌浩が風邪をひいてしまう。茵に寝かせたらどうだ？」

「む。いや、だが、晴明を待つと言って聞かなかったんだ」

「だからといって、このまま待つわけにもいかないだろう」

「むむ……だが、茵に寝かせてしまったら、明日起きた時に泣くかもしれないだろう？それでなくとも、さっきまで寝かせようとしてバカとか嫌いとか言われてたんだぞ？こっちの身にもなれ」

誰になるか。

喉まで出かかった言葉を飲み込んで、勾陣は思わず口元を緩ませた。

十二神将、最強の男がこれか。

「似合わない、な」

「どういう意味だ」

言葉通りの意味だよ、と薄く微笑しながら紅蓮に返し、勾陣は思った。

ただ人や我らに背を向けて、嫌われ拒まれることに独り傷つき、氷のように冷たい男であつた時よりも。

「ああ、早かつたな。晴明が帰ってくるようだ」

「ようやくか。む、だが昌浩はこれだし……どうすれば……」

「お前はそのままでもいいさ、早く来いと急かしてこよう」

一人の幼子に対し、どこまでも甘く、自分の気持ちを正直に打ち明ける今の騰蛇の方が、好ましい。

「頼む。今日はだいぶ夜更かしをしたから、昌浩はもう起きないだ

ろうがな」

「伝えておこう。それと、昌浩を晴明の茵にでもいれてやれば、明日起きた時に言い訳もできると思うぞ」

「おお、確かに。よし、寝かせておく」

ようやく嫌われないであろう解決策に安心できたのか、安堵の表情で昌浩を抱き上げる紅蓮に勾陣は苦笑しながら姿を消し、まもなく家路につく晴明の元へと向かった。

主の晴明はきつと、一緒にいる白虎あたりにでもすぐさま安倍邸へ送れと言い出すだろう。

慌てる晴明が簡単に予想がつき、帰ったら帰ったで騰蛇と晴明が昌浩の宵ゐについて、お互い文句をつける様子までたやすく頭に浮かび、勾陣は傾いた月を見上げ、くすりと笑った。

風に吹かれる紅葉を手に

秋も中頃、庭の紅葉が鮮やかに色付いている所で、長身の影に抱かれた幼子がいた。

「……つくちゅ！」

「昌浩、お前今日はやけにくしゃみをしていないか？」

日も高くなり大分過ごしやすい気温になったころ、腕に抱えた昌浩に思い切りくしゃみを引つ掛けられた紅蓮が、眉をひそめながら頬にかかった唾を拭う。

「んーん…なん…へん」

「なんだ、どうした？」

寝付きもよく、いつも悪戯をしては叱られるわんぱく坊主が、今朝は朝食もあまり食べず癪癪を起こしていたので、気分転換にでもと、晴明に呼び出された紅蓮が庭に連れ出したのだ。

「うれーん……へーんー……」

「変な物でも食べたのか？どこか痛いかな？」

変だ変だ、と首元に抱き着きながらぐずる昌浩の背中をさすりながら、紅蓮は途方に暮れはじめる。

子供の世話など、これが初めてで、どういう症状が一体何なのかさっぱり分らないうえに、最近になってようやく意志の疎通ができはじめたばかりの、子供の言いたい事を汲み取るというのは紅蓮には困難なのだ。

「っ……けほっ……れーんう」

「どこか痛いわけじゃないのか……？」

くしゃみをしていたかと思えば、けほけほと咳もしている昌浩。

「昌浩、お前風邪か？」

「うー……けほっけほっ！はぁ……」

子供の体温は高いものだが、ぎゅっとしがみついてくる昌浩の体温は、いつもよりも高く感じられ、肩に押し付けられた額が熱い。

「昌浩？」

「けほっけほっ……っく、ふえ……げほっ」

「ま、昌浩っ、大丈夫か？」

普段あまり泣かない子が見せた涙の兆候に、紅蓮は思わず声をあげて激しく動揺してしまう。

「晴明！晴明！昌浩がっ……昌浩が！」

「なんじゃ紅蓮、そんなに慌てて……」

先程まで太陰が晴明の側にいたが、騰蛇の近づく気配に敏感らしく、部屋の中にささやかに風を起こして異界へと戻った。

おかげでしたためにいた書状が悲惨なことになったが、晴明はそれを心の中で悲しむこととする。

血相を変えて部屋の中へと入って来た紅蓮に抱かれた昌浩の様子がいつもと違うことに眉を寄せた。

「昌浩がどうした？」

「身体が熱くて咳とくしゃみで泣きはじめたと思ったら、ああ、最初は風邪だと思ったんだが、額がとても熱くて息も荒くてすごく苦しそうでもしかするととても重く重い病かもし……」

「まあ、落ち着かんか、紅蓮」

「これが落ち着いていられるか！昌浩がこんなに苦しそうなんだぞ！」

あれほどまでに感情を表に出さなかった紅蓮のこの慌てぶりに、思わず笑いが込み上げるのを我慢して、扇で口元を隠す。

「そう慌てるでないよ、ただの風邪じゃろつて。茵に寝かせてやりなさい」

「そ……そうか、やはり風邪か……だが、こんなに汗をかいて苦しんでるんだぞ、もしかしたら」

「まあ、風邪じゃろつな」

昨日、遅くまで自分の帰りを待っていた孫は、風邪を引いてしまっただけらしい。

なんのためにお前をお守りとしてつけたのか、と嘆いてみせれば、青龍と同じくらい眉間に皺を寄せて、昌浩に泣かれるのは嫌なんだと呟いた紅蓮だ。

好かれる事に慣れない紅蓮は、未だに昌浩が泣くことを嫌がり、泣いている昌浩の傍にはあまり近づかない。

「部屋に連れていきなさい」

「分かった」

えぐえぐとぐずる昌浩を抱きながら、晴明の部屋から出ていく姿を見届けて、小さく息をつき、思案する。

しばらくすれば、紅蓮の昌浩に対する態度もまた変わってくるだろうが、それを今望むのは我が儘というものだろうか。

今でも充分笑うようになった紅蓮思うと、そう急かすこともないのかもしれない。

「天一」

「はい、晴明様」

長い髪をサラリと煌めかせて晴明の横に現れた女性、伏せていた顔をあげれば、美しく優しい面立ち。十二神将がひとり、天一。

名を天乙貴人。心を許した人物だけが、彼女を天貴と呼ぶ。

「紅蓮と一緒に昌浩を見てはくれんかのう」

「騰蛇と、一緒にでございますか？」

「何故だ」

天一の横に現れた青年が、整った顔立ちを歪ませて主である晴明を見下ろす。

「そう怖い顔をするでないよ、朱雀」

「理由を言え、晴明」

十二神将がひとり、朱雀。彼は天一の想い人であり、天一は彼の想い人のため、天一を呼ぶとたいてい現れる。

「昌浩が風邪を引いてのう。紅蓮はほれ、風邪を引いた子供は初めてじゃろう?」

「なら騰蛇を異界へ戻らせろ。昌浩は俺と天貴が見る」

「紅蓮に世話をさせる。それを横から手伝っただけでいいんじゃないよ」

平行線の二人の間にいる天一が、戸惑いながら晴明へと身体を向けて問いかけた。

「晴明様、なぜ騰蛇なのですか?」

家族や他の神将が何度も問うたことを、天一は再度晴明へと向けて言い放つ。

一見大人しそうに見える彼女は、とても芯が強く頑固でもある。

「なんでかのう。まあ、たまにはいいじやろうて」

「ですが、昌浩様にご病気ならばやはり騰蛇は側にいない方がよろしいのでは？」

「清明、天貴もこう言ってる。騰蛇を戻らせる」

朱雀の声が少しばかり厳しいのも、凶将である騰蛇に子守は向かないという理由だけではない。

幾年前の騰蛇の罪。

神将は皆それぞれ、あの時のことを心に抱いており、他の神将よりもそれは軽いように見えてはいるが、朱雀もその一人だ。

主を思つてのこと、愛しい人を思つてのこと、同じ火将でありながら騰蛇は煉獄、朱雀は浄化。全く反対の性質である騰蛇を、やはり良くは思えないでいる。

「紅蓮じゃ。今頃慌てているじやろうから、二人で少し手助けする

だけでいい、行きなさい」

他の神将の気持ちも解る。それ以上に、あの優しい心根の紅蓮が自分を責める。皆の気持ちがわかるから辛い。

カチン、と閉じられた扇の音で、話は終わった。

主である晴明が命じる言葉は絶対であり、逆らうことはしない。晴明が望むのならば、例え火の中であろうと進もう。

溶けるように消えた二人の姿と気配に、残された晴明はまた息をついた。

天一をここに呼べば朱雀もついてくることは想像でき、朱雀が快く思わないだろうということも分かっているが、いつかは分かりあってほしいと願ってしまう。

感情があるのは人だけではないのだ。

「もうそろそろ、あれを忘れて仲良くなってくれてもよいのにおう」

神である彼等にも感情はある。それが人とすべて同じだとは思わないが、それでも傷ついたり悲しんだり後悔したりするのだ。

そんな思いの塊だった紅蓮を闇の底から掬い上げたのは、生まれただけの嬰兒で。

「まあ、大丈夫かう」

あの子の存在が、もしかしたら紅蓮と他の神將の要になるのではないかと、簀子に歩み出て庭先の紅葉を見ながら清明は目を細め思
う。

ひらりと落ちた一枚が、池の中に波紋を巡らせ光った。

「ふえ、え……れえん、れえん」

清明の予想通り、首筋にぎゅうつと抱き着いて泣いたままの昌
浩をどうしていいのかわからない紅蓮が、部屋の中で立ったまま思
案していた。

泣いている昌浩が嫌いなのではない。

泣き声はどうしても苦手で、それが昌浩だと更にどうしていいの
かわからなくなる。真っ直ぐに見つめてくる瞳は、紅蓮に信頼を寄
せている。

今までそんなことは一度もなかったのだ。すぐに距離感が縮まる
ものでも無ければ、接し方も探り探りだ。

「昌浩、そろそろ離れる。寝ていなくては駄目だ」

「やあ、れえん……つく、ふ、っげほ、げほッ」

嫌々と細い首を振り、ぐずぐずと泣きながら、苦しそうに咳をする昌浩。

ほとほと困り果てた所に、見知った神気が降り立ち顕現したのを見て、紅蓮は安堵する。

目の前に現れたのは、天女のような衣に身を包み、金色の長い髪と優しく美しい顔立ちの女性、それから赤い髪に端正な顔立ち、今は少しだけ固い表情をした青年。十二神将、天一、おなじく朱雀。

「助かった。俺ではどうしようもない」

紅蓮が安堵するのも当然、紅蓮以外の神将は少なからず安倍家の子供達を見ているし、天一は昌浩の父である吉昌の面倒も見っていたのだ。

そんな紅蓮の心持ちなど知らない二人は、紅蓮から発せられた言葉に驚愕していた。

「助かった……？」

「ああ、昌浩がこんな状態で、さっきから離れようとしなんだ」

朱雀の小さな呟きに、紅蓮は眉を寄せ心底困った様子で腕の中の昌浩を落ち着かせようと背中を撫でる。

これは誰だ。

同胞である神将達がよく知る騰蛇は、笑いもしなければ無表情で口数も少なく、助かったなどと口にするような男ではない。

驚いた様子の朱雀の横で、天一がそつと紅蓮へ歩み寄る。

「て、天貴」

「昌浩様はだいぶ汗をかかれていますよね、まずは体を拭いて差し上げなくては」

「ああ、ほら昌浩、このままでは何も出来ない」

「やああつれ、れんッ……」
「ほつは、あ……ッや、いやあッ……えん！」

首から昌浩の手をはがそうとすると、いつそう強くなる昌浩の泣き声。

それを見て天一が優しく微笑をして、昌浩の熱い手を軽く握る。

「昌浩様、大丈夫ですよ、騰蛇はお側を離れませんから、さあ、体を拭いてしましましょう」

「何を……天一と朱雀がいれば俺は」

「晴明の命だ」

いつのまにか驚愕の淵から復活をした朱雀が憮然とした表情で天一の後ろに近づき、昌浩の体を拭く布をそつと天一に手渡す。

「昌浩様の看病は騰蛇にとのことでした。私たちはそれを手伝うように、と」

「意味がわからん」

「まったくだ」

男二人の呟きに、天一がくすりと笑い二人の視線を集めた。

「きっと、昌浩様が私たちでは嫌がると分かっていたのかと」

「昌浩が？」

紅蓮の問いに天一は静かに頷きながら、紅蓮の手を決して離さない昌浩の体を手際よく拭いていった。

「ええ、昌浩様が泣いていらっしやるのはきつと、手を離したら騰蛇がいなくなると思っっているからです」

「俺が……だが、俺がいても」

「つまり、昌浩は今風邪で辛い、騰蛇がいないと心細くて寂しいということだ」

紅蓮の言葉を遮るように昌浩の心情を汲み取り代弁し、それくらい言わなくても分かれ、と小さくため息をついて、朱雀は新しい衣を天一へと手渡し、体を拭いた布を受け取る。

その様子はまるで、よくできた夫だな、と関係のない事を考えながら、呟いた。

「いないと、寂しい……」

「ええ、ですから騰蛇は手を繋いだまま、昌浩様を茵へ入れてさしあげましょう」

「そう、か……」

形容しがたい感情が浮かぶ。

あたたかい。

くすぐつたい。

目の奥が熱い。

まるで光を見ているように、眩しい。

昌浩に初めて見舞えた時もそうだ。晴明に聞けばこれが何か分かるだろうか。

繋いだ手をそのまま、茵の横に腰を下ろして立てた膝に頭を傾けた。

小桂の中で身じろぎをした幼子は、体を丸めるように横になりながら、両手でしっかりと自分の指を掴んでくる。

指を握る力強さに目を細めながら、空いた手で昌浩の短い髪を撫でた。

「大丈夫だ。ここにいる」

「ふ、え……れえ」

「ああ、ここにいる」

「う、ん……」

耳に心地よく聞こえる低い声に、昌浩が薄く目を開いて繋いだ手を抱き込むように引き寄せた。

部屋の隅に腰を下ろし、隠形している天一と朱雀が、昌浩に優しい眼差しを向ける紅蓮を見ながら、ほう、と息をついた。

一緒についてでた感心の吐息に、二人は思わず顔を見合わせて笑う。

「あれは一体誰なんだろうな」

「ええ、そうね、そう思ってしまうわ」

同胞に対して、人に対して、騰蛇はあんな表情を見せない。唯一、清明だけが紅蓮を朋友と呼び、態度も緩和されているが。

騰蛇が昌浩に向ける視線や態度は、清明に向けるものとも違う。

悪くない。

朱雀は唐突にそんなことを思う。神将は皆、主である清明が大事だ。だが、朱雀にはそれと同等に愛しい人が傍にいる。

隣を見れば、紅蓮が側を離れないと分かったのか、大分落ち着いた昌浩を飽くことなく見続けている紅蓮に、彼女は目を向けていた。

その瞳は何を思っているのか。

小さく、天貴、と呼ばば涼やかな音がするようにこちらを見て、首を傾けながら微笑んだ。

愛おしいと感じる心がたまらなく嬉しい。

騰蛇にも、そんな大事な子ができたということだろうか。

「朱雀？」

鈴の音のような細く高い声に、耳を傾けながら朱雀は目を閉じる。

「悪くない、な」

その言葉の真意を汲み取り、天一は騰蛇と昌浩へ目を向ける。

紅蓮の姿勢も、眼差しも変わらず優しい。そしてそれを受ける幼い子供は、熱に浮かされ苦しいはずだというのに、隣に在る神気を嫌悪することもせず、むしろ受け入れ、安心したように眠っている。

「ええ、本当に」

眠ったまま、紅蓮の指を離さない昌浩の頬は赤く、辛いのではないかと彼が額に手をあてれば気持ちよさそうに笑みを浮かべた。

陽射しが少しばかり傾き始め、空の色が夕焼けになりはじめた頃、空から吹く風が紅葉を巻き上げる。

風に拾いあげられた紅葉の葉が、一枚一枚、ひらりひらりとゆっくり回り、踊っていた。

「全く、お前というやつは……夜警も程ほどにしておかないからこ
うやって物忌みの日に気が緩んで風邪なんぞを……」

「物の怪さん、少しは……心配するとか、なんか、ないんですかね
え」

すっぽりと頭まで被っていた厚手の袷から顔だけ出して、部屋の
主である昌浩は目の前にお座りををしている物体へと目を向けた。

純白の毛並みに首周りを一巡する勾玉に似た突起、額には花のよ
うな紅い模様。

体軀は大きな猫か小さな犬のようで、横になつた昌浩を見下ろす瞳は夕焼けをとかしこんだ色。

物の怪と呼ばれたそれは、ぴくりと長い耳を動かしたかと思えば、にまりと笑つ。

「こーんなに心配しているのにわからんとは、俺は悲しいなー、晴明の孫や」

孫、という単語に異様に力を込めて返せば、熱で赤い頬を引き攣らせながら、昌浩は掠れた声を絞り出す。

「孫っ、言つな！物の怪のもっくんの、分際っ……でっ」

「物の怪言つな！大人しく寝ている、明日も物忌みなんだから、ゆつくり休め」

最後の最後で、べしつと物の怪の小さい前足で額を押さえられ、昌浩は口ごもりそのまま目を閉じた。

確かに風邪引いちゃったのは気が緩んだせいだけどき、もうちよつとなんかないんですかね。俺今病人なんですけど。

そんな風に思つのは、滅多に引かない風邪で心細いのだろうか。

額に乘せられたままの小さな温もりが温かくて自然と笑みがこぼ

れた。

額の方が熱いと思うのに、なぜか物の怪の体温が温かいのだ。

側にいる物の怪の気配に、昌浩は安心したかのように、静かに寝息をたてはじめる。

「大丈夫だ、ここにいる」

幼い子供は何年経っても幼いまま、安心したように眠る寝顔も変わらない。

ぺたぺたと、額の熱さ確かめるようにしてから、起こさないようにそつと腰をあげた。

安らかな寝顔に答えるようにまた、ここにいる、そう呟いて物の怪は昌浩の肩口へと移動し座り込む。

その目が覚めた時、不安にならないように、と。

白い雪の降る庭で

凜とした空気が、朝方になるにつれ厳しい冷たさを増した日。

部屋に入り込む冷氣に、小さな幼子が茵の中でもぞぞ寝返りを打ったあと、瞼の重い目を擦りながらむくりと起きた。

父も母も横にはおらず、すでに朝餉の準備をしているらしい。

子供は部屋の中に一人。に見えるが、当人には部屋の隅にいる人物が見えているらしく、寝起きの声で呼びかけた。

「れーん」

閉じられた蔀戸の隙間から入ってくる冷氣が気になっていたらしい人物は、子供へと向き直り視線を和ませる。

「ようやく起きたか。ねぼすけめ」

冷たい気温の中で見るには、あまりにも寒々しい恰好の青年。ひらりと薄布を纏い、足音もなく寄る男は長身で髪の色は濃色、人とは違い尖った耳に、額に煌めくは封印の金冠。

「ふ、ふあつくしゅ！」

「お前……いい加減人の顔に唾をかけるのはやめろ」

抱き上げた拍子にくしゃみをひっかけられた紅蓮が、頬にかかった唾を拭う。

抱き上げられた幼子は、名を昌浩。数えでふたつとなったこの安倍晴明の末孫は、つい先日まで風邪をこじらせていて、ようやく元気に悪戯が出来るまで回復したのだ。

昌浩は紅蓮に抱えられ、肩の高さまであげられた所でくしゃみをし、紅蓮に飽きられた声をかけられれば、にぱっと可愛らしく笑いかけた。

「笑ってごまかすな。やっぱりわざとか」

「れーんっ。さあーむう」

「そうだな。今日は冷える」

ついこの間までけほけほと咳をしていた子供が、元気になって首周りにまとわりつく。その体温はとても温い。

何が楽しいのかわからないが、今日は朝からものすごく機嫌がいらいらい昌浩は、きゃっきゃと耳元で笑い、紅蓮に呼び掛ける。

「騒がしい奴だな、それ、今雪が降っているぞ」

「う……き？」

「雪だ。ゆ、き」

「うき？」

昌浩を抱いたまま簀子へと出れば、きんと冷えた空気が二人を包みこむ。

「おーっ。しろっ！れん！」

「白いな、まあ、まだ積もらんだろっが」

はらはらとまばらに落ちる白い雪は、手を伸ばした昌浩の小さな手の平で溶けて無くなる。

「れん、なあい」

「ああ、雪は溶けるんだ」

「とー？」

無くなった雪の結晶に目を丸めて、昌浩は無くなったことを知ら

せるように手の平を紅蓮へと向ける。

溶けた雪の滴る雫に目を向けて、紅蓮は目を細めた。

幼い子。たった一人のがんぜない子供が、陰の質を持ち、凶の名と煉獄を背負う忌まわしい神気と、己ですら嫌悪するほどのこの力に臆することなく。

心がどこまでも凍り付いていた紅蓮に手を伸ばしたのだ。

あたたかなその手の平は、紅蓮の心をゆるやかに溶かし、溶けた水は温かなものとなって、心に貯まる。

物思いに耽る紅蓮の頭を、ふいに昌浩がぐしゃぐしゃと撫でる。

驚いた顔で見つめる紅蓮に、昌浩はまた、にぱっと笑うのだ。

「お前……俺の髪で手を拭いたろっ」

「えへへー」

「えへへーじゃない。こら、笑ってごまかされると思っのかお前はどこまでもいい性格だな、そんな性格まで晴明の真似をするんじゃない」

半目でじっと睨む紅蓮に、昌浩は手を叩いて喜んでいた。

普通の子供なら、泣きわめいて熱でもだすところだろうに、この子は決して泣かない。

「お前というやつは……本当に、清明の孫だな」

言い聞かせるのを諦めて、紅蓮は雪降る空へと視線を向ける。空は白く、舞い散る雪も眩しい白。

冷たいはずのそれは、すぐに溶けて無くなる。

紅蓮の心もまた、側にいる幼子がゆっくりと溶かしていくのを僅かに感じながら、昌浩を抱く腕に力を込めた。

ゆきあかり

京の冬。

深い深い闇の中。

しんしんと舞う雪は、夜闇に紛れて静かに一面を白へと染めあげる。

きんと冷えたある日、雪は朝陽を浴びてもなおそのまま残り、巳の刻を過ぎた安倍邸の庭はきらきらと光っていた。

「れーん」

幼い子が一人、とてとてと覚束ない足取りで廊下を歩いていた。

視線をさ迷わせたあと、庭をちらりと見やりふると頭を振り

足元の廊下をじっと見つめて、幼子は一度、強く冷たい床を蹴った。

時刻を少しばかり遡り。

幼子が茵を抜け出して、そっと、いや物凄く頑張って蔀戸を開けた頃。

きらきら光る白の一面に朝方心奪われて、簀子から飛び降りそうになったところを父である吉昌に抱き上げられ、雪に触れること叶わず。

しっかりと抱き上げられたので、父の首に抱き着きながら外の風景を名残惜しく見るしかなく。

朝餉の席にはじい様がすでにして、父の腕から解放されたので、勢いよくその隣に向かいじい様の袂を掴んだら優しい手が頭を撫でてくれた。

「おはよう、昌浩や。朝から元気じゃのう」

「じいまー、お、お、よう……ます!」

朝の挨拶もそこそこに、またもや父に抱き上げられた昌浩は二人

の兄の間に連れて行かれ、ちまつ、と座る。目の前には湯気を立てる温かい粥。

「昌浩、ほら」

右隣にいるのはすぐ上の兄で、匙を使って食べてごらんと昌浩の手に小さな匙を握らせる。昌浩は匙を持ったまま、両手を合わせてきよろきよろと周りを見渡してから挨拶をした。

「いたーきます」

緩くされた粥はうまく掬えずに上澄ばかり掬って口元へ運ぶ。危なっかしい食べ方を見て両側にいる兄達はお碗をひっくり返すのではないかと心配をしていが、そんなことは知らない昌浩は、一人で粥を平らげて満足そうにお碗を置いた。口元はべったりと濡れていて気持ちが悪く、手で拭おうとしたところを一番上の兄が布でごしごしと拭ってくれる。

「上手になったなあ、昌浩」

「えへへー。ごちそーました」

母に礼をして、みんなに礼をして、パタパタと急ぎ足で廊下を走

る。庭の白い雪を見るのは我慢我慢。

一緒に遊んでもらうまで、我慢我慢。

「れーん」

冬の寒さは心の奥にあるしこりと同じで、冷たく凍えきっている。

雪の白さは眩しくて己の罪の証が際立つようだ、と紅蓮は異界の中で俯いた。

脳裡に浮かぶ光景は、紅蓮の罪の重さを忘れさせないように鮮明に思い出される。

雪に舞う鮮血。

ぼたり、と落ちた唯一主と定めた男の血、横たわる青年、白を染める紅、ぬめる指先、何かが切れる音の後に、視界を染めた紅。

騰蛇を罵倒する声、悲鳴と絶叫、自身が放った地獄の業火は炎の柱となって清明を襲った。

あれ以来、本当に必要でない限り異界から出ることはしない。

晴明はそんな紅蓮に対して困ったような、呆れたような顔をしつつもそれを許している。

紅蓮にとつて、雪が深い冬の日、己が犯した罪に深く沈むべき日であり続ける。

——れーん……。

声がする。

幼い子。

騰蛇に笑いかけ、手を伸ばした幼い子。

——れーん……！

呼ばれる声、これはこの闇の中に差す光だ。だが、今はそれを拒むことしかできない。

紅蓮は震える臉を閉じて、両手で耳を塞ぎ、なにかもを拒絶するかのよう唇を噛み締める。

何度も呼ぶその声に、俺は応えられない。

——昌浩……この騰蛇の手は、罪で汚れている

「れーん」

ととと、と軽い足取りだったものは、呼び掛けに応えない紅蓮に
対しての不満から少しだけ重くなる。

「れーん？」

もしかしたらと、長い廊下を歩いた先にある晴明の部屋を覗く。
がらんとした部屋の中。

いつもならば、祖父がいて、紅蓮がいる部屋。時々、紅蓮ではな
く他の神将がいたりする部屋。

部屋の主が不在な静かなその中に昌浩はするりと入り込んだ。

「れえ？」

見慣れたはずの部屋は暗く、高く積み上げられた書物や巻物はいつも触ってはならないと言われているものだ。

きよろきよろと周りを見回してから、昌浩は小さな手で巻物に触ってみる。

「れーんー？」

小さな小さな声で、悪戯してることを知らせるように呼び掛けるみるが、やはり応えはなかった。

——何をしているんだ、お前は

いつもならば、何かしようとするたびに抱き上げられて、やれやれと大仰に溜め息をつかれるというのに今日に限ってそれが無い。

ぺたん、とその場に座り込み、昌浩は視線をさ迷わせて、薔戸から覗き見える雪景色をしょんぼりと見つめる。

初めての景色。

あれは何なのか、きらきらと光る景色は美しく、一緒に見たかつ

た。あれはいつまでなのか、一緒に見れるだろうか。

「おや、昌浩ここにいたのか」

朝餉を終えた晴明が、部屋へと戻れば、書物の前にぼつんと座る末孫の姿。

「じいまー」

「どうしたんじゃ、昌浩」

「れん、いない」

晴明の姿にぱつと顔を綻ばせて、昌浩は祖父の元へかけより、袂をぎゅつとにぎりしめた。

「紅蓮、か。そうじゃのう、今日は難しいかもしれんのう」

庭一面に広がった雪景色と、異界に閉じこもる紅蓮を思い、晴明

は昌浩の頭を撫でる。

「いないー？」

「自分で探してみなさい、呼んだらひょっこり出て来るかもしれんからな」

「ん！」

励まされたと思ったらしい昌浩は、大きく頷いて足取りも軽く、部屋を出ていった。

「呼んで、やらないのか」

「まあ、あれもまだ探す気満々じゃしな、一生懸命なのは良いことじゃろう？」

後ろで微かに感じられた神気が、昌浩が部屋を出ると同時に強まる。部屋の隅に顕現したのは、片膝を立てて座っている青年。

鳶色の長い髪に漆黒の長布を肩に巻き付け、その瞳は透き通るような黄褐色。

十二神将がひとり、六合。

「そうか」

言っやいなや、六合は再び隠形した。彼は寡黙な青年で、多くを語ることはない。

「れーん」

歩くのは楽しいが、歩き続けることは難しく疲れるので、昌浩は今手について廊下を四つん這いで移動していた。

「んー」

見知った部屋にたどり着くが、兄の部屋や父と母の部屋に紅蓮が現れたことはあまりないので、素通りだ。

先程朝餉をとった場所はすでに静かになっていて、母の露樹が片付けをしていた。

昌浩に気付いた露木が手をとめて、昌浩を側へ引き寄せる。

「昌浩、義父上のところにいたのではなかったの」

「は、うーえ、れーん」

「ああ、いつも遊んでくださる式神殿ですか。母はお会いしたことがないのですよ」

露樹は見鬼の才がない。そのため、妖や異形の類はもちろんのこと、晴明が従えるという式神にもまみえたことはないのだ。

「はーうえー」

家事に勤しむ露樹の側についてまわったり、思い出したように紅蓮を探したり、そんなことを繰り返してる間にいつの間にか巳の刻に差し掛かるうという時刻。

時間という概念はまだないものの、そろそろ探し疲れて来た昌浩が、壁伝いに立ち上がりまた歩き出す。

「れーん」

声が届くまで。

朝からずつと聞こえていた声が無くなる。

邸の中だから心配ということはないが、それでも声が聞こえるの
とそうでないのは安心の度合いが違うものだ。

晴明は書き終えた書状を乾かしている所で、よいしょ、と一声出
して立ち上がる。

「どれ、昌浩はどこかのう？」

部屋を出てみれば、すぐに見つかった末孫。簀子に座り込み、中
庭をぼうつと見つめているのかと思えば、こっくりこっくりとうた
た寝をしているようだった。

そんな様子に、晴明は目元のしわを深くさせる。

「やれやれ、風邪を引いてしまうな」

つい最近になって風邪が治った末孫だというのに、このままでは

また風邪を引いてしまっただろう。

さて、誰を呼んだものか。

神将達は、いつでも側にいるわけではない。今側にいるのは六合だけだが、それでも異界のどこにしようと思えばすぐ彼等には名を呼べばすぐに馳せ参じる。

雪の積もった庭を眺めながら、清明は名を呼んだ。

「紅蓮」

すぐ側に降り立つ神気に目を向ければ、そこには顕現した紅蓮の姿。

「……どうした、清明」

白銀の眩しい雪景色を見ると、紅蓮のその瞳は僅かに揺れた。それに気付かないふりをしながら、清明は手に持っていた扇で廊下に座っている昌浩を指す。

昌浩の姿を見て、紅蓮の表情は複雑そうに眉を顰めた。

「部屋に連れていってくれんかのう」

「……わかった」

側に六合が控えているにも関わらず、自分と呼んだということは、清明は他の神将に昌浩の世話をさせないということだろう。

簀子に座り込む昌浩を抱き上げれば、その温もりは腕から体中に広がる。無意識に昌浩の背中をぽんぽん叩く紅蓮は、すぐ先の部屋に向かう。そんな紅蓮の背中を見つめながら、清明は薄く笑った。きっと、あの子が溶かしてくれるだろう、そんな風に思えるのは紅蓮のあの優しい眼差しが見えたからか。

腕に抱いた温もりは、一度手にすると離れがたい。

ふわりと頬をくすぐる昌浩の髪の毛。

腕にかかる重みや温もりが、心地よい。

昌浩の頭を優しく撫でながら、ふと気付く。

駄目だ駄目だ駄目だ、今すぐ茵に寝かせて気付かれる前に異界に戻ろう、そうしよう。ああ、待て待て、昌浩や、どうしてお前は俺の腕にある薄布を握ってるんだ。一体いつのまに、これを外したら起きてしまうかどうかどうするべきか。これを置いていくべきか、いや自分が来たと気付かれてしまうか、それでは呼び掛けに応えなかった意味が無いではないか。

——などと思案しているうちに、昌浩の瞼がぴくりと動く。

「ん……う？」

昌浩は紅蓮の腕の中で小さく身じろぎし、しばしばと目を瞬かせる。紅蓮は顔をあげた昌浩の視線から逃げられず、そのまま目を合わせた。

泣いてしまったりするだろうか。

その瞳が、真っ直ぐ自分を見つめてくることが、今はこんなに辛い。

純真無垢な子供の瞳は、時として何もかもを見透かしているように思えるのだ。

そんな紅蓮の気持ちなど知らない幼い子供は、探し人がいつの間にか目の前にいることに一瞬驚いた様子で目を丸くする。そして、すぐに顔を綻ばせて、寝ぼけた声で呼び掛ける。

「れえん」

何度呼んでも探しても、姿を見せなかった人が目の前にいる。

「あー！れん！れん！」

「なんだ、まだ眠いだろう、寝ておけ」

「やあも、れん、あー」

昌浩が指差すのは、今きた廊下。戻れというその意思表示を受けて、紅蓮は小さく息をつく。気負っていたのは自分だけで、昌浩はいつも通りだ。廊下の先にはすでに晴明の姿は無く、中庭には真っ白な雪が光を反射していた。

ぱつと顔を明るくして、昌浩は紅蓮を見上げる。

一緒に見たかった、遊びたかったものが目の前にあるのだ。

見上げた先の紅蓮は、目の前に広がる白銀の景色を眺めていた。感情の籠らない金色の瞳は、揺れることもなく時が止まったかのよう。

思い出される情景に、心臓がキリキリと締め付けられる。

——れえーん

ふと、昌浩に呼ばれた気がしたかと思うと、頭に何か触れた。

視線をのろのろと下げれば、一生懸命腕を伸ばして紅蓮の頭を撫でようとしている昌浩がいた。

「なに、を」

「いたーい？」

そつと紅蓮の髪を撫でる昌浩は、心配さを含んだ視線を向けて首を傾げる。

「れーん？」

「ああ……いや、大丈夫だ」

「うー」

心配をしてくれるのか。そんな価値など己にはない。これは背負うべき罪だ。辛いなど、言えるわけがない事なのだ。

む、とした表情で、昌浩は頬を膨らませて今度は両手で紅蓮の頬を包んだ。頬を包む小さな掌はとても温い。

「れん、いたーい」

その言葉に、行動に、今度は紅蓮が目丸くする。この子はどこまで見透かしているのだろうか。なぜ、痛い、辛い、辛い、わかるのか。昌浩は紅蓮に嘘をつくな、とどこが痛むのか確かめるようにぺちぺちと紅蓮の頬を叩く。

「こら、叩くな。大丈夫だと言っているだろう」

「むう」

「嘘などついていない。平気だ」

紅蓮が笑いかけやると、昌浩は安心したように顔を綻ばせた。

先ほどと同じように、今までと同じように、変わらず、真っ直ぐ見つめ、その温もりは紅蓮の冷たいものを溶かす。

ゆっくり。

ゆっくり。

「昌浩、落ちるなよ」

声をかけながら、昌浩の身体を支えやると、両手いっぱい雪を持ち上げてきゃっきゃと笑う子供。

雪の冷たさなど感じない程喜んでいるらしい昌浩を抱き上げてやれば、見ると言わんばかりに目の前に突き付けられた雪の塊。

「手、冷たくないか」

「たーい」

手の平の感覚が無くなってきたらしい昌浩は、持っている雪をどうしようか思案したあと、紅蓮を見上げた。

「わかったわかった、持っていてやる」

雪など目の前にいくらでもあるというのに。

昌浩から雪を受け取ると、手の中で冷たい雪が少しずつ溶けていくのが感じられた。

ぴゅ。

「……おい」

「えへへー」

雪を預けても手は冷たくて、どうしようか思案した結果、昌浩は紅蓮の頬を濡れた手で包んでいた。

小さな手も、頬も、冷たさの分だけ温かさが感じられ、それ以上に熱いものが込み上げる。

「えへへーじゃないだろ、お前な、人で暖を取るんじゃない」

半目で問い掛ける紅蓮に、昌浩はぎゅーっと紅蓮の頬を潰して、にぱっと笑いかけた。

「れーん」

変わらない笑顔で。

閑話 嬰兒の名（前書き）

みどりこ
嬰兒…生まれたばかりの赤ん坊の事

和さんの中での出会い。妄想ですー。原作の二人の出会いとは異なっているのでご注意くださいませ。いや、被ってるけど。

閑話 嬰兒の名

—— 小さな小さな、嬰兒が生まれた。

安倍邸が今までになく騒がしい声で包まれていた。

それは、とても歡喜に満ち溢れている声だ。

「生まれたか」

誰もが喜んで、笑って、温かい眼差しを赤子に向ける中、歡喜とは程遠い眼差しをした青年がいた。

顔立ちは美しいほど整い、瞳はまるで炎のような色。髪は濃色で、肩あたりまである長さはざんばらで整っていない。

彼は、安倍晴明に従う神の眷属。六壬式盤りくじくばんに名を連ねる、十二神将がひとり騰蛇とうだ。晴明の式神であり人ではない。

晴明の部屋で、一人溜息をついた騰蛇。

子供は嫌いだ。

十二神將最強の神気はとても苛烈で、畏怖の念を相手に与える。

特に、赤子は本能でそれを感じ取り、泣く。

それはそれは盛大に、泣くのだ。

安倍家は代々陰陽師を生業としている。

安倍清明を筆頭に、息子二人、孫二人も陰陽寮にて働き実力は他の者よりも高い。

それでも、やはり騰蛇の神気には怯え泣いた。

大人となった今では泣きはしないが、怯えを隠す様は痛々しくも見える。

だから、というわけではないが、騰蛇は必要以上に人間界には顕現しないようにしている。

特に孫二人の成親と昌親は、元服したとはいえ14歳程の子供だ。

ただ、いくら自身で気をつけても、向こうから傍に来てしまう場合がある。

また、溜息をついた騰蛇。

毎度の事とはいえ、それを考えると憂鬱な気分になってしまう。

騰蛇がここにいるのは、晴明に呼び出されたからだ。

呼び出されぬ限りは、異界に留まっている騰蛇だが、できれば今すぐこの場を離れたい。

「紅蓮、おるかの？」

やや弾んだ声音で晴明が紅蓮を呼ぶ。

顕現している今、紅蓮の神気でどこにいるかも分かっているだろうに、わざわざ確認をしたのだ。

「ここにいる。全く……懲りない奴だな」

呆れた声を出しながら、紅蓮は廊下に出る。

白い袷に包まれた赤子を抱いた晴明がそこにいた。

先に産まれた孫二人とも、こうやって対面をした。まるで儀式かなにかのように、晴明は産まれたばかりの赤子を紅蓮に引き合わせる。

「はて、懲りるようなことをしたかのう？」

白々しく答えながら近づいてくる晴明に小さく息を吐き、身構える。

「男子じゃ、可愛いぞう」

「あまり近づくな。子供は嫌いなんだと、何度言えば分かるんだ」

「まだ泣いておらんだろうに」

眉を顰め、身構える紅蓮はいわゆる怖い顔なのだが、晴明はこれが赤子を思ってたのことだと知っている。

「それ以上近づいたら泣いてしまう」

「すやすや寝ておるよ、ここまで来ても泣かんのは、この子が初めてだのう」

晴明が腕に抱いてる赤子は、落ち着いた様子ですやすやと寝息を

たてている。

「起きたら……泣くだろう」

考えてみれば、ここまで近づいたのは確かに初めての事だった。

先に生まれた成親や昌親は、紅蓮の神気を感じ取るなり泣いていた。

その度に紅蓮は異界へと戻り、晴明はそれを見送っていたのだ。

「起きないのう……寝ておる」

「なぜ……」

「なぜかのう……紅蓮、抱いてみるか？」

いきなりの申し出に、紅蓮は戸惑い、首を横に振った。

「寝ているんだ、やめておけ」

「そうか。なら、少し顔を見てはどうだ？そこではよく見えんだろ
う」

十分に近づいているのに、晴明はあえて紅蓮から更に近寄るよう呼ぶ。

紅蓮は少しばかり思案し、言われたように晴明へ近づき抱かれた赤子を覗きこんだ。

「どうじゃ？」

「こいつ、鈍いんじゃないのか？なんで寝てられるんだ」

よもや一番強いと謳われる紅蓮の神気が傍にあつて、平然と寝ていられる子供がいようとは思ひもしなかった。

「そうじゃのう。可愛いのう」

紅蓮の言葉なんぞには耳を貸さず、すでに末孫にデレデレの晴明だ。

「おお、起きたのか？」

身じろぎをした赤子に、紅蓮は硬直した。

ああ、きつと泣かせてしまつ。早くここから居なくななくては。

そう思うのに、赤子の顔から目を離せなかったのは――

「泣かないのう」

「あ、ああ……どこまで鈍いんだ？」

紅蓮を見ても泣かない、開いたばかりの目は、真つすぐに紅蓮を見つめて、ふいに笑った。

紅蓮は驚き目を見開いて、そのままつられるように優しく微笑をした。

「可愛いじゃろう？」

「ああ……そうだな」

「昌浩じゃ」

「ん？」

「この子の名は、昌浩じゃよ」

騰蛇は十二神将で最も忌み嫌われる凶将と言われるが、それは性
状であり紅蓮の一部に過ぎない。

「まさ、ひる」

「そう、昌浩じゃ」

こんなにも優しい魂だというのに、人からは怯えられ、他の神将からは嫌悪される。

昌浩の顔を優しい眼差しで見つめる紅蓮を、晴明は嬉しそうに見つめた。

「昌浩……晴明の孫、か」

闇に光を照らす様に、紅蓮の冷たくなった心に温もりを与え、笑みを与える存在。

紅蓮が、命に換えても守ると決め、晴明以外に呼ばせはしない、唯一無二の至宝である紅蓮の名を呼ばせる権利を与えた幼い子。

小さな小さな、嬰兒が生まれた。

嬰兒の名は昌浩——安倍昌浩。

歡喜の声に包まれた安倍邸は誰もが喜んで、笑って、温かい眼差しを昌浩に向けていた。

季節の変わり目

季節の変わり目

「昌浩、大丈夫か？ 苦しいか？」

「う……う」

小さな身体を丸めて、苦しそうに息をつく幼い子。
昨日は少し咳をしていたが、今日になって本格的に風邪をこじらせ熱を出し、咳をしては苦しそうに呼吸をしていた。

「はあ……ッげほ、う……えん」

「まだ熱が上がりそうだな……寒いかな？」

小さく震える身体にもう一枚袢をかけてやり、汗が滲んでいる額に自分の手のひらを置いて熱の具合を測る。

紅蓮は炎を司る神将だ。凶将であり、他の神将達の中でも一番強い神気を放つ彼が、何故風邪を引いた幼子の世話をしているのか。こんな状態の子供の傍に自分を置くとは一体どういふつもりなのだろうか、あの主。

紅蓮が小さく溜息をつく。昌浩と目が合った。昌浩は額に置かれた手をぎゅっと握り、目を細めふわりと笑う。

子供の体温は大人よりも高く、風邪を引いている昌浩の体温は更に高い。

紅蓮は火将なので、相反する水将よりは体温が高いかもしれないのだが、それを確かめた事などはない。昌浩の額は、紅蓮の手のひらでも充分熱いと思えるもので、当の昌浩は冷たい感触に目を細めただけなのだろうが、ふいに与えられた笑みに紅蓮の頬も緩む。

「れえ……ん」

「大丈夫か？」

桶に張られた水に布を浸し、昌浩の額に乗せてやると、また手を握られた。

胸を上下させながら、痛い喉を我慢して息をし咳をし涙ぐむ。そのまま紅蓮の手を離そうとはせず、握ったまま頬を擦り付ける様子に、当の紅蓮は微笑む。

「大丈夫だ、ここにいる」

「ん……」

冷たい布と、温かい手の感触に昌浩は目を瞑りようやく眠りにつ

いた。

落ち着いてきた呼吸に、紅蓮もまた安堵の息をついた。この様子であれば、今日明日大人しくしていればすぐに風邪も治るだろう。

人間の身体は脆い。神将である自分から見れば、人の人生そのものが短く儚い桜のようにも思えた。病を患えば床に臥せ、精神を患えばまた床に臥せ、そのまま命が消えることもある。ことさら、子は病に弱い。

昌浩の手はまだ熱い。まだ紅蓮の手をしっかりと握っている。生きている。

目が覚めた時、すぐに顔が見れるよう、傍にいる。手をしっかりと握り、ここにいる、そう繰り返してもう片方の手で昌浩の頭をしっかりと撫でた。

「つくしゅー！」

季節は秋から冬へと変わり行く頃。

外の空気はすっかりと冷たくなって、虫の小さな囁きも聴こえなくなりました。

仕事も終わり、今日は外の見回りを休憩して自室で本を読んでいく。遊んでるわけではなく、それでも修行だ。

「なんだ、昌浩風邪か？」

白い犬とも猫ともつかぬ物の怪は、火鉢の傍らで丸くなっていたが昌浩のずずと鼻を嚙るのをピクリと耳に聞きとめて顔を上げた。

「んー、いや、ただのくしゃみだよ」

首を小さく横に振り、昌浩はまた目の前の書物に目を落とす。

物の怪は目を細めて小さく息をついた後、昌浩の肩にその重さを感じさせずに飛び乗り前足を昌浩の額に当てた。

「ちょ、もっくん邪魔だよ」

「お前ちよつと熱っぽくないか？」

「え、そうかな？」

自分で額に手を当ててみてもさしていつもと変わらない体温だと思っただが、と昌浩は首を傾げる。

物の怪はまたも小さく息をついて、昌浩の前にある机に仁王立ちし昌浩の持っていた本を取り上げる。

「あつ、何すんのさもっくん！」

「寝ろ」

「大丈夫だよ、ちょっとくらいの熱なんて平気だってば」

「駄目だ、風邪を侮るな。どうせ今日は外に出ないのだろう？ならもう茵に入れ」

いつもになく真っ直ぐな物の怪の言葉に、昌浩は仕方なく従い寝巻きに着替える。物の怪はその間もてきぱきと動いて、昌浩が出していた読み物を綺麗に片付けていた。

「もっくんて、意外と几帳面だよなあ」

あの長身の体躯で本を綺麗に並べていたり掃除をしたり、自分を甲斐甲斐しく世話をする様を思い浮かべると少し笑えた。

「早く寝んか！」

「はいはい、おやすみもっくん」

「もっくん言うな」

近くに来てぴしっと尻尾を降る物の怪に手を伸ばし、ずるずると引きずりこんで腕に抱く。

「これはなんだ、昌浩」

「湯たんぽ」

「む……」

いつもなら反撃の言葉をぶつける所だが、もしかすると風邪のせいで寒気なのかもしれないと悶々と考え、結局抱かれたまま大人しくするしかない物の怪だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9536h/>

晴明の孫

2011年9月17日15時27分発行